

貧しさが原因で義務教育を終了できなかった人たちのために設置された夜間中学。行政管理庁から一度は早期廃止の勧告を受けたが、旧満州から引き揚げた戦争孤児が仲間と共に抗い、復活をめざす。

夜間中学・武器となるコトバをく高野雅夫

ジャーナリスト 西村秀樹

《釜ヶ崎で日本研究》

大阪・西成区にある日本最大の寄せ場、釜ヶ崎にとぎならぬ若い女性のにぎやかな歓声が響いた。普段、建設・土木関係の日雇い労働者が目につく男くさい街。そこに、色鮮やかなコートやブランドもののバッグを提げた大学院生一行一〇人余りが行き交う人びとに真剣なまなざしを向ける。

彼女たちにあれこれ日雇い労働者の現状や釜ヶ崎の街の様子を説明しているのは、七〇歳を前にあごまで白毛交じりのヒゲもじゃ男。目鼻立ちの彫りは深く眼力が強い。七

〇歳を迎えると客員教授になれないからと立教大学の田中望教授から三顧の礼で頼まれ、日本の最下層の実状を学んでくれるならといういやいや引き受けた大学院教授の仕事。院生の多くは韓国や中国からの留学生、日本人は少数派。指導教官は大学院生に釜ヶ崎のドヤ（簡易ホテル）での宿泊を義務づけた。

この指導教官がタカノマサオだ。わたしがタカノを初めて知って二〇年近いが、電話をかけてくるとき、いつも「夜間中学卒業生のタカノマサオです」と名乗る。なぜタカノが大学院で教えるのか、タカノは誰か。



《満州生まれの戦争孤児》

ふつうならここで生年月日を記すのがノンフィクションの常套だが、実はタカノの正確な生年月日はわからない。生まれ年は一九三九年であったらしい。場所は大本帝国が軍事力で中国東北部につくった傀儡かたがねの国家・満州国。タカノの父は大日本帝国軍人であった。父親に関する唯一の記憶は、タカノが四、五歳のころ父親が戦死、黒縁の額に兵隊の帽子をかぶった遺影が通夜の祭壇にまつられた。そのときの葬式まんじゅうの甘さをよく覚えていてという。母親の記憶もほとんどない。現地の子どもと遊ぶ路地裏には、真冬になると捨て子の赤ん坊がカンカンに凍りつきキューピーみたいに可愛く、いつものように蹴飛ばし遊んでいたら母親が鬼のような顔をして怒鳴ったのが記憶に残る。母親は病弱で寝たきりの状態。

一九四五年夏、日本は戦に敗れた。満州から日本本土へと港をめざすが、途中で母親とはぐれた。避難民の群れは「チャンコロ(当時の中国人への蔑称)やロスケ(当時のロシア人への蔑称)に皆殺しにされる」と、昼間息を殺してコーリヤン畑に隠れた。

当時の日本人が中国人や朝鮮人への残虐行為のしつぱ返しをされると誤解した。夜になるとぞろぞろと行進を始め

たが、食物も飲み物もなく赤ん坊がおっぱい欲しさに火のように泣くと大人の男たちが「皆殺しにされるぞ」と赤ん坊の首を絞め殺す。「どうせ殺されるなら」と男たちを突き飛ばし実の母が自分の赤ん坊を殺した。誰かが小さな子どもを買いに来る。食べ物と引き替えに子どもを交換する姿をタカノは何度も目撃した。タカノは自らを戦災孤児ではなく戦争孤児と規定する。なぜなら侵略戦争に加担したおやじとともに直接、間接多くの人たちを殺して生き残ったからだ。

戦争孤児、これがタカノの出発点だ。

《オレの神様に文字を習う》

日本への帰路は不明だが、貨物船に乗り上陸した港は九州の博多港であった。博多の敗戦後の闇市ではドロボウ、ケンカ、カツアゲ、カッパライ、スリ、空き巣、生きるために何でもやった。乞食マツの親分がピンハネをするので文句を言ったら、逆に木刀でめつた打ちにされ半殺しで捨てられた。「腹いっぱい食えるぞ」との殺し文句で誘われた先は略農家で、午前四時に起こされ牛の世話などこき使われ、我慢できず米五升を盗んで夜中に飛びだした。

一五、六歳ごろ、戻った博多の闇市でタカノは浮浪児仲間「戦友ゴンチ」が目の前でタカノをかばうようにして

チンピラに刺殺される現場を目撃する。次は自分の番ではと恐れ、タカノは大事な戦友を見捨てるが如く無賃乗車で列車に飛び乗った。ようやくたどり着いたのが東京。上野公園で三、四日間水だけで飲まず食わずで暮らし、山谷に流れ着き意識がほとんどなく倒れかける寸前「おいおい」とリヤカーを引いた小さな爺さんが助けてくれた。食べたのは犬の肉か猫の肉かわからない肉と葉っぱの屑の入った煮込みうどんであった。

タカノはこのお爺さんをオレの神様と呼ぶ。オレの神様は在日朝鮮人の廃品回収業者。朝から晩までリヤカー引きを手伝いながら「お爺さん、名前を教えてください」としつこく頼んだ。ほとほと困ったお爺さんは屑の中から、いろはがるたをタカノに与えた。凧たこの絵で「た」、蟹かにの絵で「か」、幟のぼりの絵で「の」、毬たまの絵で「ま」、猿さるの絵で「さ」、桶かじの絵で「お」と並べ、読み方と書き方を教えた。一七歳、耳で覚えた音としてのタカノからひらがなの名前になった。はじめて自分の名前と文字を獲得したので。野良犬から人間になった時だという。「やっと、たかのまさおと書けた時、煮込みうどんを食べた時とはまったく違う、新たな熱い感情が頭のテッペンまでこみ上げてきた。嬉しくて嬉しくてバタ屋の仕切り場の中を夢中でころげ回った」。

ある朝オレの神様は冷たくなっていった。台東区役所から

小型トラックが来て、お爺さんの骸を荷台で運んだ。汚いゴミでも扱うようにゴキブリ扱いをする役人の態度にたかのは腹が据えかねた。「どんなことをしても文字とコトバを奪い返してお爺さんの仇を討つてやる」と泣いた。たかのはあの涙こそ、オレにとつての「人間宣言」だったと振り返る。

《夜間中学へ》

武器となる文字とコトバを奪い返すため、雨で仕事にあぶれるとたかのは山手線に乗り、隣り合わせた乗客に何度も質問を繰り返し何周も回った。乗客の中には迷惑がる人が中にはいたが、乗客の多くは漢字の一つ一つ質問に丁寧

に答えてくれた。
しかし、独学には限度があり、何としても学校に行きたいと願いは募るばかり。そんな折り、今は亡きオレの神様が「こんな夜の中学があるぞ」と示した、夜間中学の教師が書いた本のことを思い出した。このときすでに二一歳。当時、夜間中学は二五歳までの年齢制限があると危惧しながらも、たかのは一縷の望みにすがって東京・荒川区立荒川第九中学を訪ねた。

文字が書けないために夜間中学を志すのに、入学手続きで書類に記入が必要になったらどうしよう。「文字が怖い」

という感覚は最下層の人間以外わからないでしょうとたかのは言う。どうしても正門から入れず一度はあきらめた。二、三日同じことを繰り返し、どうしても入学したいと悪知恵を發揮し、「夜間中学をテーマにした映画を作るのでシナリオを書くために勉強させてください」と申し出た。ところが教師はすべてお見通し。「あなたの半生をぜひみんなに話してほしい」と励まし、全校生徒の前で自らの生い立ちを初めて話させた。「その時受けた熱い拍手とみんなの笑顔は今でも鮮やかに蘇ってくる。それはオレにとつて生まれて初めて差別のない社会を知った歴史の瞬間であり、仲間たちとの必然の出会いであった」。

中学入学には戸籍が必要とわかり、知り合いのサンドイッチマン宅にいったん住民登録し、厚生省引揚援助局、法務省を周り、一九六二年三月一二日、家庭裁判所は「たかのまさお」を日本人と認知、荒川九中の入学が決まった。裁判官が誕生日はいつがいいかと尋ね、世界中の人が祝ってくれるからと次の日を提案した。クリスマス。だから誕生日は一月二五日となった。戸籍の名前は「高野雅夫」。漢字のタカはハシゴ高と呼ばれる漢字を使う。あるとき交通違反で警察官に違反切符に署名を迫られたとき、簡略体の「高」ではオレの神様が命がけて教えてくれた文字とは違うので絶対ダメと署名を拒否、ひと悶着起こした。それ

ほど文字一つ一つに愛着が深い。

《学ばないと生きてるといってを問い続けるって》

一九六二年四月、高野は荒川区立第九中学に入学する。ここには高野を魅了する生徒や教師がいた。教員養成の東京学芸大を卒業し、そのまま夜間中学を志した国語の教師、見城慶和だ。一九三七年生まれだから高野と年齢差はわずか二つ。

見城は生徒たちの気持ちを理解せねばと、シンナー常習の生徒が勤めるプレス工場で朝から一緒に働き、製品を全部お釈迦にして大損害を工場に与えてしまった経験があるし、やんちゃな生徒たちに何度も何度も裏切られても生徒を疑わなかった。高野は「神様見城慶和との出会いがあなたの人生を狂わせてしまった」と恨み節めいた最大級のほめ言葉を口にする。見城はのちに山田洋次監督が製作した映画『学校』のモデルの一人となる。

荒川九中の二部、つまり夜間中学の全生徒は一三歳から最年長が二七歳の洋菓子職人、次が二四歳の美容師見習い、二一歳の高野は三番目だ。高野は毎朝、担任の見城に同行して、同級生の暮らしを体験した。同級生は親の借金のかたに土木建設業者の親方のところへただ働きさせられたり、薄暗い小さな工場で真っ黒になってプレス機を

扱ったり、身体を粉にして働いていた。高野は二年後（六四年三月）荒川九中を卒業する。「同情を憎み矛盾に怒れ」と高野は卒業記念の国語辞書に書いた。

この年、東京オリンピック開催の年。高野は盲腸炎で入院した病院で看護婦と出会う。看護婦との初めてのデートに山谷を選んだ。道ばたにゴロリと酔っぱらいが横たわり、公園に日雇い労働者がたむろする。高野は自分の故郷をどうしても看護婦に見てもらいたかった。「これからはただ食うためのためには死んでも働きたくない」。これが高野のプロポーズの言葉であった。

高野によれば、人間以下に切り捨てられたオレたち日雇い労働者が、誇り高き労働者として人間の尊厳を奪い返していく闘いを示したかったという。杉並・善福寺の木造二階建てアパート四畳半を借り、翌年六五年八月、長男生が誕生、土木建設や運転手など日雇い労働を続けた。高野にとって夜間中学は知識を学ぶ場ではなく、生きることを問いつける場所だった。

《夜間中学に死刑宣告》

長男が生まれた翌年（六六年一月）、行政管理庁が文部省に夜間中学の早期廃止を勧告した。五四年のピーク時、夜間中学は全国で八七校、生徒数五千人を数えた。しかし

その後、各地で夜間中学の閉鎖が相次ぎ、全国で一九校にまで減少した。行政管理庁の言い分は、夜間中学は学校教育法に規定がなく、就学年齢の年少者が働くのは労働基準法違反であり、夜学校に通うのは非行につながりかねないという。しかし高野にとって夜間中学は親も同然、廃止勧告は死刑宣告にも等しいと受け止めた。

ここからが高野の真骨頂。当時、夜間中学の生徒の多くは最下層の労働者や農民の子弟。昼間働き夜間中学に通う。両親がいるのは三分の一、多くは片親か両親なしだ。廃止勧告への反対運動の手段として高野は映画作りを選んだ。

取材に訪れたTBSから会社に内緒で一六ミリムービーカメラを、ニッポン放送からも録音機(デンスケ)を借り、カメラを教師が、録音を高野が担って三学期から夜間中学生の叫びの撮影が始まった。「夜間中学の廃止は俺自身の心臓をえぐり取られることだ。夜間中学を何としても守りたい。それは過去二七年間受け続けた差別の繰り返しに對するたまらない怒りだ」。上映時間四八分、制作費三三万八千円。荒川九中夜間学級一〇周年を記念した映画『夜間中学生』が六七年五月に完成した。高野は日雇い労働をして運動資金を作り、映画の上映運動で行政管理庁からの夜間中学死刑宣告に抗っていった。

上野から青森へ。八戸市民会館で上映。「東北では夜間中学がないから信じられない。夜間中学という名前を初めて聞いた」と冷たい反応。今度は青函連絡船に乗り北海道へ。五四日間、四一回の上映で五千五百人が観た。続いて一月、岡山へ。岡山で高野は部落解放同盟員に勧められ生まれ初めて水平社宣言に出逢う。心臓が火を噴き頭と心と体がバラバラに爆発するように、歯がガチガチして震えが止まらなかつたという。「吾々がエタであることを誇り得る時が来た」、この文言から高野は「夜間中学生であることを誇りうる時が来た」ことを確信した。しかし翌六八年三月末、京都市内で嘉楽中学夜間学級が廃止され統廃合が進み、事態は好転しない。

《大阪で夜中の設置運動》

六八年当時、大阪市には夜間中学がなかつた。大阪では部落解放運動がすすんでいるから義務教育未終了の生徒はいないと当局側は反論した。高野は二月に栄養失調と過労が重なり教研集会で倒れ、しばし体力を回復させ、一〇月、高野は堅い決心で大阪を訪れた。昼一昼一八〇円の釜ヶ崎のドヤに拠点を置いた。証言映画が武器だ。上映会を各地で繰り拡げていく。

一一月、関西テレビで桂米朝司会のネット番組『ハイ、

土曜日です』で夜間中学の必要性を訴えると、番組放送中、大阪府下で夜間中学への入学希望者四人から電話が入った。早速高野は関西テレビのディレクターと東住吉区の入学者希望者の自宅を訪ねた。電話の主、小林晃一家は八人家族、五二歳の父は病で床に伏せ母は病弱で働けず。二一歳の長女がアルサロで一家を支え、長男は一七歳、一六歳の次男が溶接工見習いで稼いでいた。三男、四男、五男は中学、小学校で勉学中という六人兄弟。次男は夜間中学で学び溶接工の免許を取りたいと希望を述べた。高野は小林晃に神戸市内の丸山中学西野分校を紹介し入学が実現した。

小林晃は国鉄関西線平野駅から天王寺駅大阪駅を経て阪急梅田駅から高速長田駅まで片道一時間二〇分余り、神戸通いが始まった。これをきっかけに大阪市内での夜間中学設置運動が急速に進んだ。あごひげを蓄え胸と背中に「大阪に夜間中学を」とのゼッケンにつけた高野は中の島にある大阪市役所を訪れ、教育委員会はもちろん教職員組合など関係する場所を毎日毎日訪れ、波状攻撃をかけた。また繁華街、心齋橋商店街で大阪市内に夜間中学をと訴えるビラ三〇〇万枚を撒き続けた。TBSが当時『浮浪者マサの復讐』という三〇分ドキュメンタリーにまとめ放送したが、大阪では高野の番組を見た人がまた高野を励ました、「がんばりや」と。

翌一九六九年一月、全共闘が立て籠もっていた東京大学安田講堂が機動隊の手で陥落。同じ年大阪で夜間中学がスタート、日本の教育の両極端が現れた。六月五日、国鉄天王寺駅から東に徒歩一〇分、大阪市立天王寺中学に夜間学級が設置された。小林晃は片道一時間二〇分から、関西線平野駅から天王寺駅までわずか五分、通学時間は大幅に縮まった。天王寺夜中の入学者は町工場や零細商店で働き義務教育未終了の生徒ばかり八九人。四〇年後（二〇〇九年六月）、同じ天王寺夜中で開設四〇周年を祝う同窓会が開かれわたしもこの会に参加したが、多くは夜間中学卒業後、調理師などいろいろな資格を得て人生が変わっていったことを目の当たりにした。身近な場所に夜間中学が設置され、仕事をしながら学べる喜びはいかばかりであったろう。高野は「もし一〇年早く夜間中学ができていたら、この八九人の仲間はずっと豊かな人生を送れたはずだ」と悔やんだ。

《形式中学卒業者の登場》

大阪市内に菅南かんなん中学が、東大阪に長栄ちやうえい中学、堺さかいに殿馬場とのまば中学、八尾に八尾中学と「燎原の火のごとく」（高野の表現）夜間中学が増え、行政管理庁の早期廃止勧告は実質的に骨抜きになっていったかに見えた。そんなとき二〇歳の女性

が高野の前に姿を現した。古部美江子と名乗った。古部は形の上では中学卒業の資格をもちながら実際には学力がないうい、いわゆる形式中学卒業者である。

一九七〇年、古部は荒川で開かれた全国夜間中学研究会で演壇にたち夜間中学の入学制限を糾弾した。「生活に追われ四歳頃から、子守、コンブ拾い、農家。パチンコ屋、飯場の飯炊き、バーのホステスなど学歴を必要としない仕事についてきた。だけど簡単な漢字以外新聞は読めない、九九もわからない。足し算や引き算の計算は指や足でやればできるが、時計の見方や電話の掛け方など日常生活に必要な知識がなんにもわからず毎日苦しんだ。こんな私でも義務教育を受けたことになっているんです」と夜間中学への入学を求めた。

古部は「九九も出来ない中学卒業生をつくつたやつは責任とれ」とのゼッケンを胸につけていた。古部の告発は行政や教師だけに留まらなかった。「知識を詰め込むことが勉強だと信じている生徒。詰め込ませるのが教育だと信じている教師。夜間中学の変質と危機感を鋭く問い続ける古部美江子は『夜間中学に差別を作ったのは誰だ』というビラを作り、俺たち（高野）に突き付けた」と高野は振り返る。

七二年二月、古部は北海道で自殺を図り未遂で帰京し

た。荒川九中で孤立した結果だ。高野が入学を憧れ、献身的な教師らが実現した夢の教育の場は「お金が第一」という拝金主義の時代精神にしだいにむしばまれていった。高野ら夜間中学生がぶち当たった壁は行政から、立身出世のための教育システムという既存の社会システム全体に抗うことになった。行政は実質的義務教育未終了者という新たなカテゴリーを作り、古部ら形式卒業者の夜間中学入学を認めた。

《国際識字年が転機に》

一九九〇年、国連の国際識字年をきつかけに転機が来た。国勢調査の結果によれば（一九九〇年）、義務教育の未就学者が大阪府下だけでもおよそ一万人もいることが判り、教職員組合を中心に夜間中学の増設を要求する運動が始まった。大阪では、夜間中学の生徒が増加し始めた。

ギギー。ギギー。自転車のブレーキが軋む。太陽が西に傾き、黄色い光りが長い影を形作っていた。自転車にのつた夜間中学生がつきつきに校門に吸い込まれていく。近鉄・布施駅にほど近い東大阪市立長栄中学の夜間学級は、当時（九三年）、生徒数四百人を超す日本最大のマンモス夜間中学であった。体育館に夜間中学の全校生徒が集合する

とクラスごとの行列の長いこと長いこと。

在日朝鮮人が多数暮らす、大阪・生野区に夜間中学がなかったため、すでに設置してある東大阪の夜間中学に数多くの在日朝鮮人が通学する。このため、生徒たちは満足な教育を受けられるように、最初は地元・東大阪での増設さらに猪飼野での新設を要求した。こうした要求は長栄夜間中学の長い行列を見ただけでわたしにもすぐ理解できたし、この映像をテレビで放送すると大きな反響があった。運動は盛り上がった。高野雅夫が応援に何度も現地を訪れた。

康友子^{カンユウコ}は長栄夜間中学の太平寺分教室の生徒会長である。康友子は在日の二世。昼はスーパーマーケットでパートとして働き、夜は中学に通学、五十歳代半ばであった。康友子は観音様のようなふくよかな笑顔で、生徒たちの多様な意見に耳を傾け、みんなの調整に努めた。

夜間中学には在日朝鮮人の女性が多い。封建的な儒教精神が根深い朝鮮の家長制の家庭では、たとえ貧しくても一家の大黒柱となる男の子を学校へ通わせ、女はそうではなかった。けれども時が流れ子どもたちが育ち、家事労働から解放された在日の女性たちは友が友を誘う。「あいうえお」から文字を学ぶ夜間中学は学びが人にどんなに大事かを知る場所であり、教師が夜間中学の生徒から人生を学ぶ場所でもあった。

○ 「現代の理論」バックナンバー案内

定価1,000円(送料込)
注文は明石書店まで

08 秋号 [Vol. 17]

特集 地球環境危機への挑戦

鼎談 日本の環境政策確立へ何が必要か

気候変化への対応は第三の革命を必要とする

低炭素社会への環境経済戦略

国内排出量取引制度導入の課題

どこがおかしい日本のエネルギー政策

持続可能な福祉社会と持続地帯

今求められる日本の環境政治とは

東京都の気候変動対策

地域からの政策革新

地震列島の原発問題

「休息时间」なくして「ワーク・ライフ・バランス」なし

労働契約法から「労働関係基本法」へ

「近代」の子ども観・子ども政策の皮肉

内なる敵対性

座談会 苦闘する大学自治会の今を語る

モンゴル雑記

資料 中華人民共和国労働契約法

石井昭男さん(明石書店社長)がマグサイサイ賞を受賞

井田 徹治
鮎川 ゆりか
松下 和夫

西岡 秀三

一方井 誠治

諸富 徹

飯田 哲也

倉阪 秀史

今本 秀爾

大野 輝之

牧野 光朗

武本 和幸

小林 良暢

田中 清定

本田 和子

尹 汝

京都精華大学

立命館大学

金高 毅

劉 偉

長栄夜間中学で取材を始めて半年。増設運動のハイライ
トが訪れた。夜間中学の生徒たちが、地元の教育委員会に
連続四日間ピラマキと座り込みを決行した（九三年一〇
月）。生徒たちの要求は長栄夜間中学の隣、太平寺中学の
分教室の設置、続いて独立を求めた。四日間は長い。康友
子は座り込みの合間ちよつといつぷくしようと思つて自宅に帰つ
た。ところが康友子の連れ合いが「今、座り込みの人数が
少ない時間帯とちがうんか」と心配したという。いつもは
無口な夫が、この時ばかりは「早う行つて来いや」と励
ました。康友子の活動を家族が支えた。そのことをうれ
しそうに教師に報告した。とはいえ美談ばかりではな
かった。

わたしが康友子のインタビューをテレビニュースで放送
したところ思わぬ反響があった。和歌山県串本に居る康友
子の母親が「お前を学校に行かされへなんだ恥を、テレビ
で言うて」と悲しんでいる、と弟から電話で伝えられたの
だ。康友子はそれを聞いてすぐに串本の母のもとに飛んで
帰った。「親を恨んでいるわけではない」と説明した。（世
の中の艱難辛苦を舐めた康友子はわたしに一言も愚痴をこ
ぼさなかつた。わたしはその話を懇意にしている夜間中学
の教師からそつと教えられた。それを聞いて、わたしは顔
がみるみる真っ赤になるのが自分自身で判つた。そんなこ

とも判らないで、在日朝鮮人や被差別部落の人たちを取材
しているつもりになつたのかと思ひ知らされ、自分自身の
未熟さを恥じた）。

母親が悪いわけではないことを、ほかならぬ康友子が一
番よく知つていた。しかし、康友子の母親は娘を学校へ通
わせられなかつた屈辱感を残像として心に秘めていた。残
像のある風景とはこういう風景なのだ。高野雅夫はずつと
この運動に寄り添つていた。生徒たちの座り込みの結果、
東大阪市の教育委員会は独立校の申請を大阪府教育委員会
に提出。二〇〇一年四月、太平寺夜間中学は生徒たちの望
みどおり独立した。また夜間中学の空白地域であつた猪飼
野に、一九九七年四月、東生野夜間中学が誕生した。夜間
中学の生徒たちが自らねばり強い闘いを繰り広げた結果、
ようやく夜間中学ができた。

《韓国 の 識字 学校 へ》

高野が二四歳で荒川九中を卒業して三五年経ち（一九九
八年八月末）、韓国のソウルへ高野は飛び立つた。ソウル
大学語学研究所で朝鮮語を学ぶため、下宿は二食つきで月
三万五千円。二〇歳前後の若者たちに混じつて、六〇歳を
前にした高野が語学を学んだ。予想通りというか予想以上
というか、語学習得に手間取りついに一度は落第し、再度

チャレンジしてようやく一級に合格した。「暗記はするな、暗記しても辞書には勝てない。物知り博士になるな、百科事典には勝てない。なぜ夜間中学に来ているのか。なぜにこだわる」。

高野はかつて荒川九中夜間中学に入学し「学ぶ喜びは生きる喜び」を実感した、その熱き血のほとばしりを再びわがものにしたかったに違いない。語学に留まらず西大門刑務所歴史館を訪れ、大日本帝国の植民地朝鮮での政治犯への拷問や弾圧を通して東アジアの近現代史を学んだり、キムチと一緒に作り韓国人の暮らしを実感したり、高野は「文字とコトバを奪い返す原点(闘い)」を確信した。

もう一つ高野の韓国訪問の理由は、荒川九中時代の同級生を探すことだった。通名大川隆夫、本名を金同恒(キムドンヘン)といい、一九五五年に日本に密入国し両親と三人荒川で暮らしていたが、六八年摘発され母親と二人長崎の大村収容所に収容された。その大村収容所から「助けてほしい」と高野に手紙で惨状を知らせてきた。高野は強制送還の阻止をめざしたものの、結局、韓国に強制送還されてしまった苦しい想い出がある。

ソウル滞在中、新聞の探し人欄など八方手を尽くしたが、金同恒の行方はようとしてわからなかったが、五九歳の誕生日(一九八一年二月二五日)直後、ソウルの知人の尽力

でようやく電話連絡がとれた。しかし相手は「日本へ行ったこともない」と言下に否定。本人に間違いはないものの密入国で強制送還された秘密を家族に打ち明けていないのではと相手の事情を忖度し、結局三〇年振りの再会はかなわなかった。高野は「残酷な歴史の現実」と総括した。その夜、金同恒が強制送還以来過ごした三〇年の歳月に思いを馳せ、高野はついに眠れなかった。

日本と韓国の民衆連帯といえはいささか大げさな表現だが、韓国では識字教育が九〇年代初頭から盛んになり、そうした識字教育への興味が訪韓の背景にある。世界では非識字者がおよそ一〇億人、夜間中学に中国残留孤児や東南アジアからの外国人が増えた。

「夜間中学はなんであるのか。どうやってつくったのか。げんいんはだれがつくったか」。行政管理庁の夜間中学死刑宣告に抗って、高野が作った映画『夜間中学生』のラストシーンが高野の同級生多胡正光の文章で締めくくられている。このラディカルな問いかけに日本社会はきちんと答えているであろうか。

(文中敬称略)

にしむら・ひでき

一九五一年生まれ。ジャーナリスト。著書に天阪で闘った朝鮮戦争、「北朝鮮抑留兵に岩波書店」など。